

学習者個別の情報付与と他者への公開を可能とする デジタルバッジアドオンの開発

天野 慧*, 長岡 千香子*, 喜多 敏博*,
都竹 茂樹*, 鈴木 克明*, 平岡 斉士*

Development of a Digital Badge Add-on for Linking with Individual Learners' Information and Publishing to Others

Kei AMANO*, Chikako NAGAOKA*, Toshihiro KITA*,
Shigeki TSUZUKU*, Katsuaki SUZUKI*, Naoshi HIRAOKA*

1. 問題

教育実践において、学習に費やした時間や履修したという事実ではなく、学習目標の習得度で学習者それぞれの成長を評価し、それに応じた支援をすることは重要である。しかしながら、現状では、授業や研修に出席したという事実や学習目標を網羅していないテストを受験・合格したことを根拠に修了認定をしているケースが多い。すなわち、学習者が何をできるようになったのかを確認しないままプログラムの修了を認めてしまっている実態がある⁽¹⁾ため、どのように教育プログラムの修了を認定していくかが課題となっている。

教育機関が、学習者が何をできるようになったのかを評価したうえで、プログラムの修了を認定する仕組みの一つとして、デジタルバッジがある。いわゆるバッジというツールは、オンラインゲームでの活動に対するインセンティブとして活用されるように、外発的動機づけを創出する「ご褒美」として導入される場合が多い。ただし、インセンティブとしてバッジを授与することで、学習目標の達成よりもバッジを集めることが目的化してしまう、というデメリットがある⁽²⁾。

デジタルバッジの期待される活用法は、このような外発的動機づけを促す役割だけではない。期待される活用方法として、ネットワーク技術の特性を活かして、修了証明と学習者の個別の成果物をリンクさせることで、学習目標の達成を証拠とともに提示できること⁽³⁾、そして、それらをSNS等で他者へ共有できる⁽⁴⁾ことが挙げられる。このようなデジタルバッジの機能は、学習者が何をできるようになったのかを振り返ったり、専門家から合格認定を受けた成果物を職場の同僚等に共有して業務改善の契機としたりといったように、教育プログラム修了後に学習成果を活用するためのメディアとしても期待されている⁽⁵⁾。

修了認定とデジタルに記録された学習成果物のリンクをするうえで、eラーニングを提供するプラットフォームとして普及しているLMS (Learning Management System) を用いることが有効であるが、修了証明としてのバッジと個別の学習成果物をリンクする機能が実装されておらず、バッジにエビデンスを付随させることができないという課題がある。さらに、第三者に公開する場合、LMSのコースへのアカウント登録と認証が必要になるため、教育機関で運用されているLMS上では成果物の共有をすることが難しい。つまり、教育プログラムを受講していない第三者には

* 熊本大学教授システム学研究センター (Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University)

受付日: 2018年5月31日; 再受付日: 2018年8月17日; 採録日: 2018年9月9日